講話

母の心理（四）

東京女高師教授　牛島義友

第三節　賢母の面（下）

（二）教育者としての母

母は常に子供の教育者である。子供は絶えず軌道をはずれたり、無駄な態度やいたずらを行う故に、母は子供を自然のまま放置することはできない。この教育者として臨むことは親にとつては別に深刻な問題は起すことはなく、たゞ自己を反省し子のために美しく生き、子のために逞しく歩み、子のために必死の精神をつみ、子のためには拙き命をも長かれと切に祈る氣持である。これは小さい努力かもしれないが、日ごとの心構えであるので、母としては却つて重い重荷かもしれない。

先ず若い母は子供を理想的に育てんとの熱意に燃え、その目から子供の生活環境を眺めると、不足だらけである。育児に關する無經驗による自信のない氣持、育て方に關し家族の者と意見の不一致に關する不滿、家庭外の亂暴な無教育な子供の社會をみた時の不安に焦驕と憂慮を感ずるであろう。

彼が生れ落ちるときから細心に實行した特殊な待遇――一種の教育としての隔離法――を抛棄しなければならない時がきたのだと感じました。彼女に取つては、これは可なりの不安であり憂慮であり、一種の悲しみでさえありました。

善良な話の外は聞かせない、美しいものの外はみせない、

正しい言葉の外は覺えさせまいとしての極端な隔離法が、實際子供に取つてよい事か悪い事かは、彼女自身にすら突き詰めた所は分らなかつたが、若い母親の用心と無經驗からきた過大の恐怖か、その場合否應なし彼女にその決心を起させたのでありました。

「本當に私は無人島へでも連れて行つて育てたい位に思つていました」野上彌生子著『小さい兄弟』（一八九頁）

この無人島にでも連れて行つて育てたい氣持は若い知的な母親のいつわらない氣持であろう。從つて知的な家庭に於ては學齢に達するまでは近所の子供と遊ばせないものも少くない。幼稚園にやることがよいということは知つていても、近所によい幼稚園が無いといつてやらなかつたり、小學校も評判のよい學校を選びたがり、そのために無理な電車通學を强いる場合も多い。

子供の教育に親が熱心であることは大變有難いことである。自分をふりかえつてみても、貧窮の中からも非常な努力をして子供たちの學費を作り、大學まで出してくれた母たちに對しては心から感謝が沸いてくる。この感謝は凡らく大多數の子供達が夫々の親に對していだく感謝の心であろう。又かかる子供を立派に教育した母の美談も數多く語り傳えられている。しかし子供の教育に餘り夢中になりすぎて、子供の能力以上の要求をするのは却つて子供を不幸にすることがある。勉强ができないといつて餘りに勉强させようとすると子供は却つて勉强をいやがるし、よい上級學校に入學させようとして、子供より親の方が一生懸命になるのは果して適當な態度であろうか。よい學校を選ぶことは望ましいが、この標準は子供の能力に相當した學校であり、秀才教育を誇る學校ではなく、凡ての子供の個性を生かし、健全な性格教育を主とする學校でなければならない。

處が親はとかく程度の高い學校をのぞみ、又子供の成績が他の子供より少しでも上位であることを望んで、みにくい競爭心を持つことが多い。かゝる極端に教育熱の高い親には、子供のためというより、自分のために熱中している場合がある。即ち逆境にある親、志を得ず不遇をかこつ親は自分が一生の中に成し得なかつたものを子供によつて成熟させんとするもの、子供を通しての補償作用の働いている場合がある。

幼時から農園で働かされて教育を受けなかつた或父親、彼は毎日勤勉に仕事をしているが、一向うだつが上らず下積の生活をして不遇をかこつているが、之は自分が教育がないばかりにこうなつたのだと思いこんでいる。だからせめて息子にだけは充分教育してやりたいと一生懸命になつていた。息子は小學校の頃はどうかこうかの成績をとつていたが、元來智能が優秀でないために、中學校に入つてから成績がかんばしくない。もう學校にゆくのはいやだと父親にいつたりするが、父親はひどくその不心得を叱り、しきりに鞭撻していた。子供はしかたなしに學校にゆくが、學年末にはついに落

第となつた。しかし父の怒を怖れて成績をごまかして報告していた。しかし非常に氣になるので、或日若し自分が學業を途中で止めたらお父さんはどうなさるつもりですかと父の心を打診する意味で尋ねてみた。處が父は怒つて、そんな時には追出してしまうという調子であつた。そのために子供は自分の落第を正直につげることもできず、思い餘つて遂に家出をしてしまつたという。この子供も後に教育相談を受け、農業學のような處に移り、低い職業教育を授けて早く社會に出るようにしたところ、大變工合よく行くようになつたという。

かく親が餘りに高い要求を持ち、子供がそれに應じ得ない時には却つて不幸にするものであるから注意を要する。

餘りに教育的な態度。教育のある親で、一家の見識を持ち、自分の理想に從つて子供を教育しようとする親から案外に困つた子供がでてくることがある。

或嚴格な宗教的家庭に育つた母親の例であるが、彼女は、自分が子供の時に育てられた通りに自分の子供を育て上げようと一生懸命である。自分の子供の頃はこんな遊びはしなかつた。映畫などはみなかつた。間食はしなかつたと、嚴しく躾けられた想い出をもつており、又育兒の本等も度々讀んで子供を嚴しく教育していた。しかし子供は十三頃になると、却つて嘘言をついたり、金を持出したり、學校を怠け、母が叱ると却つて反抗し始末におえない子供になつたという。

いわゆる教育的な態度、嚴格一點張の態度、子供に適當な自由を許さず、溫い感情が躾の中ににじんでいない教育は困つた親の態度である。

義理に生きる母。民主的社會は個人の自由が尊重され、個性を發揮することのできる社會である。しかし古い社會、社會制度や道德の硬化した社會に於ては、社會の要求と個人の要求や感情が著しく喰い違つていることが多い。封建時代に於ては主君とか家に對する忠義、孝行が强調され、このために親らしい感情を犧牲にしなければならないことが多い。封建制度が確立し天下泰平の時でも色々なお家騷動等の問題が起り、かゝる場合に主君のため、義理ある人のために吾子を犧牲にしなければならないような場合が起ろう。かゝる場合に感情を抑えて義理に生きることが賞讃される。從つて封建時代の文學などではかかる義に生きる人々を讃えるものが多い。伽羅千代萩に於ては千代松が殺されるのをじつとこらえて見守つた淺岡の態度や、寺小屋に於ては御恩を受けた菅丞相の子菅秀才の身代りに吾子小太郎の首をはねた松王夫妻の態度が讃えられている。しかしかかる義理に生きることは封建時代のように、忠義を盡すことによつて自分の名譽となり家の繼續が保證されているような社會に於ても、親としては實に耐えがたい苦痛である。したがつて、子供を犧牲にした後、一人となつて慟哭する母、殘された親に對し觀衆の同情が猛然と集り、共にもらい泣きをする。

かかる義と情の板ばさみになるのは戰爭の場合に最も多く經驗され、封建社會といわず、今日に於ても、國家のために

一身を犠牲にするのは名譽とされ、子供をお國に捧げることは家の譽と考えられるように教育され、指導されていた。したがつて吾子を國に捧げた母は道德感からはよく死んでくれたといいつつも、內心の悲しみに慟哭している。この內的矛盾による苦惱に取亂すことなく耐える時に軍國の母として賞讃される。

「ちいしやんもよく訊いてくれました。實はあの子が戰死したという知らせの電報が來た時、かねて覺悟はきめていたが、どきんと胸をつかれて、目の前がぐらつくやうで、何とも云えない氣がしました。しかし、村長樣の手前、嫁の手前、……第一、あの子の『名譽の戰死』に對して、取亂しては恥かしい。泣くまいと心をきめました。それで遺骨が着いた時も、夜伽の時も、葬式の日も、涙一滴人にみせなかつた。嘸氣强い人と、村の人も、宅の嫁なども思つたでせうが、ちいしやん親子ですもの、何で悲しくない事があろう。夜は每晩、泣いて泣いて、泣き明かした晩もあります。

或日お墓に參つて、其の日は誰も居なかつたから、今日こそ腹一ぱい泣いてみようと思つて、あの子が生れてから二十二年間の事を思い出して、嬉しかつた事、樂しかつた事、優しくして呉れた事等、それからそれと思いつゞけて、『健次々々』と、あの子の名を呼んで、聲を立てて泣いた。さうして後には、墓標に取縋つて泣いた。涙が止め度なくこぼれた。とう〳〵地面に打臥して泣いた。

日が暮れかかつたから、もう歸ろうと思つて立ち上つたら目がみえない。ぼーッと霞んで、あの石段がどうしても降りられない。目を泣き潰すというから、若しかしたら泣き潰したのではなかろうかと思つた。やつと石段を手さぐりするようにして降りて、とぼとぼと、日がとつぷり暮れてから宅へ歸り着きました。」八波則吉著『母の勝利』（六八—七〇頁）

「日本の母は泣き得る女性です。人目がなければ伏し轉び、前後不覺に泣き沈む優しい心の持主です。しかし、泣くべからざる場合、泣いて恥しい場合、こんな場合には胸に千斛の涙を堪えながら、目に一滴の涙も見せない女丈夫です。此處が西洋の女と日本の女の違う所です。」

八波則吉著『母の勝利』（六八頁）

かゝる態度は日本の女と西洋の女と異る特長だといわれる。これは母自身の本來の感情が相違するのではなく、彼女等に與えられた道德の相違であり、この道德を要求する社會の相違と考えるべきではなかろうか。即ち日本には封建的遺制が强く殘存し、個人より家や國家を重視する社會であつたために、國のために個人を犠牲にすることが立派な道德とされ、この道德のために日本の母に苦しみが課せられた譯である。

この道德は時代と社會によつて相違するであろう。從つて封建的な賢母は段段みられなくなるかもしれない。併しいつの時代、いかなる社會に於ても、人は本能の〔二七頁へ〕

うなると仲々自分の思うようにはしないものです。

うたでも同じでしようが、本當の創作はこういうきまつた時間にあるのではなく一日を通じて何時表われるか分らないものなのでしよう。これをとり上げうまくまとめてあげるのが私達の大切な仕事の一つだと思います。

スキップにつきましては、お子さんはとても好きですし、私は又、日常の生活と何か關係があるような氣がして、お遊戯の時間はもとより、普通の時でも、時間をかけ相當重視してやつております。ひとくみのお子さんをみていますと、それが大體三段階位に分けられると思います。

（一）は、音樂を聞く事より、音に合わなくても何でも腰をおとして小走りに走る。

（二）は、前よりいくらか進歩して、ジャンプをすることが加わつて、片足を片足にひきつけ半分出來上つたスキップのような型。

（三）は、やる樣子は色々あるにしましても、始めから出來るもの。

（一）は稀である。といつてよいので、問題は（二）から（三）になるまでですが、大きい人とちがいますので、一々を分解して教えることもするにはしますが、その前に、それはそれで、ほめておいてあせらず或る時期がくるまでまちます。何となく變つてきそうな足の運びになつてきた時に、手をとり片足づつゆつくりと足のもつてゆき方を一緒にしてみます。その折は恥かしがつたり、ゆつくりする事がめんどうであつたりする爲、よい加減にしてしまうこともありますが、其の感覺というものはどこかに殘つているように思われます。そして暫くすると大抵は出來るようになるようです。

（三）の方はそれでよいのですが、足のあげ方が悪いために前にころびそうになる方、自分の膝のもつ彈性を知らず伸ばしきりにしてするために窮屈そうな方等、くせのある方には、一番大切なことを一つだけ云つてなおすようにしてあげます。これらはともかく、もつと氣になるのは、よく出來、相當スピードを持つている方でも、それから受ける感じが下品な方があります。それも腕の振り方や身體の動かし方による癖からそう感じられるのだと思いますので、きれいな方をよくみせたりして極力なおすようにして上げています。

以上で私の小さい經驗によるお話しを終りにいたします。

（幼稚園協會夏期講習會で）

〔三一頁から〕

ままに生きる譯ではなく、夫々の道德、信仰に統禦された生活を送らねばならない。而してこの道德に生きる時に動物と異つた人間らしい姿がみられる。

國家のために妻子を捧げる代りに、社會正義のために、或は、神のため、眞理のために吾子を捧げねばならないであろう。獨子イサクを燔祭として献げるアブラハムの信仰が要求され、ゴーゴリの母の態度が要求されるであろう。

かゝる試練、心的葛藤を經て母は崇高な人格に向上する。